



通
漢
楚
軍
談
全



俗通

漢

楚

軍

談

全

(岡山製本)

通俗漢楚軍談

定價金八拾五錢

明治四十五年一月十三日印刷
明治四十五年一月十六日發行
明治四十五年二月廿五日再版發行

不許複製

編輯兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

大賣捌所

三省堂書店

東京市神田區裏神保町一番地

同

三宅莊藏書店

大阪市東區南本町四丁目

緒言

通俗漢楚軍談十五卷は、漢楚興亡の事蹟を叙したるものにして、古來通俗三國志と相並びて、支那軍談物の雙璧と稱せらる。時代は、秦の始皇が阿房宮建立に始まり、漢、天下を統一し、高祖死して惠帝嗣立するに終る。其間群雄並び起り、劉邦項羽互に衡を争ひ、天下を舉げて戰亂の巷と化す。記事波瀾に富み、筆致亦簡勁にして而も委曲を盡し、卷を追うて興味益々深きを覺えしむ。

本書は一部の書の翻譯又は翻譯案にあらず。廣く諸史小説を涉獵し、之に作者の想像を加へて脚色せるものなり。されば其内容も、殺伐悲慘の事實のみを記さず、まゝ義理人情の纏綿を描ける一篇の歴史小説にして、婦

女童幼も尙ほ之を愛讀したるは好く人の知る所也。

作者夢梅軒章峯は元祿時代の人、傳詳ならず。通俗唐太宗軍鑑、通俗兩漢紀事の著あれども、最も廣く行はれたるは本書也。但し本書は八卷以下筆者を異にすること跋に見ゆ。

今本書を校訂するに當りては、古版本を原として假名遣を正し、句讀點を一定して勉めて通讀の便を圖りたれども、特に送り假名は原本に従ひ、其他文字語句の疑はしきものは、妄りに私意を加へて改竄するを避けたり。

明治四十四年十二月

校訂者 石川 核

通俗漢楚軍談目錄

卷之一

始皇巡狩望雲氣	一
張良下邳遇黃石公	八
趙高矯詔立胡亥	四
劉邦芒碭山斬蛇	二〇
項羽會稽城興兵	二六
范增獻策立楚後	三五

卷之二

章邯劫寨破項梁	四五
項羽殺宋義救趙	五一
項羽九戰章邯	五八
趙高指鹿爲馬	六三
章邯避禍降項羽	七二

卷之三

酈生使韓借張良	八一
望夷宮二世被害	九〇

卷之四

沛公入關軍霸上	九六
范增算運觀天文	一〇一
項伯夜走救張良	一〇六
鴻門會樊噲排闥	一一三
范增奮激碎玉斗	一二五

卷之五

項羽殺子嬰稱霸王	一三一
項羽封天下諸侯	一三九
陳平定計救漢王	一四六
張良燒蜀棧道	一五四
項羽拒諫烹韓生	一六〇
張良賣劍說韓信	一六八
項羽江中弑義帝	一七七
韓信背楚逃咸陽	一八一
韓信問路殺樵夫	一八五
蕭何深奇韓信才	一九七
韓信爲治粟都尉	二〇四
蕭何月夜追韓信	二一〇

卷之六

漢王築壇拜韓信	三二
蕭何議罪釋樊噲	三二
韓信執法斬殷蓋	三四
樊噲明造蜀棧道	三四
韓信暗度陳倉道	三五
辛奇斬虎遇韓信	三七
周勃陳武取散關	三六

卷之七

韓信火攻破章邯	二六九
韓信定計取三秦	二七六
漢王咸陽會張良	二八五
張良說魏豹降漢	二九六
樊噲受計擒申陽	三〇三

卷之八

王陵迎太公歸咸陽	三二三
樊噲擒司馬卬	三三〇
陳平逃楚歸漢	三八

卷之九

董三老遮道說漢王	三三六
項羽大戰彭城	三四二
隨何說英布歸漢	三五八

卷之十

韓信滎陽見漢王	三六九
韓信車戰破楚兵	三八〇
魏豹背漢被擒	三八八
王陵母伏劍自殺	三九七
韓信斬夏悅張全	四〇八
背水陣韓信破趙	四一五
反間計范增憤死	四二七
紀信滎陽詐降楚	四三七
周苛縱公守城死節	四四七
漢王走趙奪韓信印	四五七
童子外黃說項羽	四六二
齊王怒烹酈食其	四七三
囊沙計韓信斬龍沮	四八二

卷之十一

張良躡足封韓信	四九一
項羽伏弩射漢王	五〇二
廣武山漢楚大戰	五〇九
項羽欲烹太公	五二二
界鴻溝漢楚約和	五二九
漢王成臯會諸侯	五四二

卷之十二

漢王大兵出成臯	五五一
季布周蘭諫項羽	五六三
九里山十面埋伏	五七三
張良吹簫散楚兵	五八三
項羽悲歌別虞氏	五九〇
項羽烏江自刎	五九七

卷之十三

漢王卽帝位封功臣	六〇五
田橫義士死海島	六二三
婁敬議遷都咸陽	六二〇

卷之十四

高祖僞遊雲夢	六三八
陳平計解白登圍	六三六
張良託赤松子遊	六四九
陳豨破番兵背漢	六五六
高祖御駕駐邯鄲	六六五
呂后未央斬韓信	六七一
蒯徹淮陰葬韓信	六八〇
醬彭越賜諸侯	六八七

卷之十五

英布反漢被擒	六九五
四皓羽翼太子	七〇二
張良從四皓歸山	七〇九
高祖長樂宮拒醫	七一五
惠帝卽位享太平	七二五

通俗漢楚軍談

夢梅軒章峰

卷之一

○始皇巡狩望雲氣

夫明王の得^レ時而興^ル、必有所^レ命。故に能^ク建^ス不朽之基而福祚長く子孫に流^ル。秦^ノ詐力を以て海宇を并吞し、萬世に帝たらんと欲せしかども、三世にして滅び、高祖義を唱て匹夫より起り、大漢四百年の業を開く、是龍戰虎爭終に所以歸^ス其主なり。つらく史の所載を考るに、陽翟の賈人呂不韋、振る女を莊襄王に獻てより、呂政秦の統を嗣で六國を滅し、われ德兼三皇、功過五帝たれば、皇帝と尊號を立て、天下の耳目を新にせん、今よりわれを以て始として、第二世第三世につたへ、綿延して位を萬世に及さんとて、自ら始皇帝と稱せらる。此より邪侈日に長じて、天下を三十六郡に分ち、兵器を銷し、十二の金人を鑄て國の富を示し、章臺を上林





に起、復道を上阪に通じて、夥しく工作を興し、宮室を創立して諸國の美女をえらび聚め、人間の遊樂不極と云ことなし。或時群臣に向て、古の聖王は天下を巡て民の風を視玉へり、朕これに效て巡狩せんと欲す、如何あらんと宣へば、群臣みな申けるは、昔より有道の君は天下を巡行して民間の苦疾を觀る、所謂坐明堂而聽政なり、若つねに九重の深に居玉はば、天下の利病いかゞして知玉ふべき、陛下よく古意に合ひ玉へり。始皇つひに御駕を促して隴西を巡狩し、偶雞頭山の高に登りて望玉へば、東南の方に雲氣ありて、五色の光隱々たり。近侍の臣に、あれは如何にと問玉ふに、宋無忌と云もの答て申けるは、雲氣の出るに各不同あり、祥雲彩雲霽雲慶雲は皆まことの雲なれども、今の雲氣は雲にはあらず、大に貴氣なり、龍五色を成て其應不すこしきなら小、これ陛下ならでは鎮ること能はじ、親ら東南に巡狩して、寶を以て鎮玉はば、此氣自ら消すべし。始皇けにもとて、直ちに東國を巡行し、鄒嶧山に登て、石を立て功德を録し、東嶽太山を封じて、自ら帶せられたる太阿と云寶劍を山の麓に瘞め、淮水を超て、其より南郡に到り、咸陽宮へ還幸なりぬ。されども常に東南の雲氣を怪く思しめして、御心樂み玉はざりければ、之を慰なぐさめ奉ん爲に、群臣奏して申けるは、此間打つとき天氣融和にして、御園の花あらそひ開け、春風催もよほす興きよう時節にて候に、など鬱々として御座候ぞとて、寶輦を飾けれ

ば、始皇つひに後宮の美人を伴ひ、東園に御幸し玉ふ。其行装盡善盡美たれば、花柳も色を添て、千紫萬紅一時の榮を極たり。始皇や久く花下に逍遙し玉ひ、顯慶殿に登て坐し玉ひしが、不覺仗几ねむり玉へり。時に何やらん物の響音して、天地震動し、紅の日輪御前に落たりしが、身に青衣を披て、面は鐵の如く、眼に重瞳ある小兒、東の方より走來り、日輪を抱て去らんとするに、又紅衣を披たる小兒、南の方より馳來り、汝なにとて日輪を取んとする、我天帝の命を奉たり、速に還せと呼はりて、互に爭うて打合けるが、青衣の小兒、初の間は力強して、紅衣の小兒を連打こと七十二度。されども紅衣の小兒肯て倒ず、力を出して一度打たれば、青衣の小兒地に倒て死たりけり。此に依て紅衣の小兒日輪を抱て南を指て去けるを、始皇聲を揚て、小兒しばらく住れ、汝は如何なる者ぞと問玉ふに、小兒答て申けるは、我は是堯舜の裔、豐沛に生れ、先咸陽へ入て義を興し、四百年の基を立と云すて、南を指て走去けるが、雲掩ひ霧起て、紅の光ひらめきければ、始皇忽然として夢打驚き、つくぐと御思案あるに、皆不吉の夢なれば、わが秦の天下つひに他人の物となるべきかと思し食て、御心不安宮中へ還せ玉ひて、群臣と長生不死の藥を求め、萬世までも天下に君たるべしとぞ議せられける。宋無忌申けるは、東海の中に三の仙山あり、十洲三島蓬萊方丈の諸山、八節如春、四時清朗にして寒

暑を覺ず、甲子を知ず、此中に長生不死の藥あり、これを服せば壽命無窮べし。始皇宣けるは、卿この仙山を見たるか。宋無忌が曰、方士徐福と申もの、曾て東海に至て、蓬萊方丈の中に、多くの仙人鶴にのりて逍遙するを見たり、今臣が家にあり、召寄て問玉へ。始皇いそぎ召よせて、長生不死の藥を求べき様を尋玉ふに、徐福申けるは、藥を求ること尤難と云ども、大船十艘を造て、童男童女各五百人、金銀珠玉飲食器用の物を載て臣に授玉はば、東海に行て不死の藥を求來ん。始皇無限よろこび、詔を下して大船を造らせ、用意ことごとく備りければ、徐福つひに東海を指て出去り、其のち杳に何の音信もなかりければ、徐福が行衛を見て參とて、又盧生と云る儒者を遣さる。盧生詔を受けて海邊まで出けるが、烟波渺茫として、見るに膽冷く、何くを指て出べき様なかりしかば、長嘆して空く回り、始皇の罪に行玉はんことを畏れて、直ちに太岳の山中へ入、仙人の跡を尋ねて東華の頂へ登りたりしに、頭は蓬の如く、面垢つきたる人、石上に臥居たり。盧生これは如何さま異人ならんと思ひ、前に近付て見れば、其人起て問て曰、こゝに來るは何ものぞ。盧生が曰、われ始皇帝の命を受、長生不死の藥を求んとす。其人笑て申けるは、天數すでに定りて、大限のがれ難し、世上安ぞ長生不死の藥あらん。盧生その言の不凡を見て、再三長生の道を乞求ければ、其人側なる石を推て

洞とし、一冊の書を取りだす。上に天籙祕訣と題せり。乃ち盧生に授て申けるは、此書を始皇に授て詳に見せしめよ、内に生死存亡の數あらん。盧生書を取てその仔細を問んとするに、彼人又石上に臥、眼を合せて言す。此に依て爲べき様なく、咸陽へ回りて始皇に見え、東海茫茫として徐福が行衛を尋問べき跡もなく、東華の頂へ登て異人に逢、一冊の仙書を授りしに、直に陛下に獻れと申候きとて、彼書を上りければ、始皇これを御覽あるに、外に天籙祕訣と題して、内には歴代の遷り易る圖をなし、蝌蚪の文字を以て書たるが、皆隠し言にて、中々世の常の人の曉べきにあらず。李斯に命じて字義を釋せしめ玉ふに、亡秦者胡也と云る語ありければ、扱は秦の天下を亡べき者は北方の胡ならんかとて、太將蒙恬に人夫八十萬を授け、中國と胡の疆に、高く萬里の長城を築せ、夥しく國用を費し、民の嗟を積で、却て秦を亡ものは御子胡亥なることを知玉はぬこそうたてけれ。其後東は大海を填、西は阿房宮を建、南は五嶺を修し、殿閣を造り連ねて、工作の絶る間もなく、先王の制法を更て、肆に事を行ひ、其過を人の議論せんことを恐れて、李斯が教を聽て天下の書籍を燒廢、侯生盧生など云る者を先として、儒者と呼る者四百六十餘人を土坑へ入て填ころし、若頭を交て物がたりする者あらば、市に引出して誅せんと觸ければ、太子扶蘇これを諫て、儒を學ぶ者は皆孔子を以て法と

す、今陛下重く之を繩し玉ふ、恐くは天下安かるまじと申されけるを、始皇大に怒り、汝いかなれば朕が意に逆ぞ、今より中國に居こと勿れとて、北の方上郡へ遣して、蒙恬が軍を監せしめ、猶も東南の雲氣を怪く思しめし、亂をなす人や有んとて、又東國を巡狩し玉ふ。近年山東の國々は打つゞき飢饉して、百姓みな安からざるに、御車の通る處、一日に數萬の金銀を費しければ、百姓多く逃かくれて、怨嗟ずと云ものなし。

○張良下邳遇黄石公

其ころ韓の國に張良字は子房と云ものあり、五代まで韓の國に仕て宰相となり、始皇に國を滅されて、常に故主の讐を報ぜんと思ひ、千金を以て天下の壯士をもとめ、何とぞして始皇を殺んと狙けり。或日淺山と云處を過て、傍なる酒店を見れば、多くの老人酒を飲で様々の物がありたりをし、天下の變化古今の興廢を論じけるが、其中に趙三公と云る老人あり、五百年以前には、天下太平にして人民みな快く樂みたりと云ふ。諸人いかなるを太平と申ぞと問ば、趙三公答て曰、熙々たる風景、皞々たる年光、黎民鼓腹笙歌の聲不絶、三日一風、風不鳴條不摧林木、五日一雨、雨不破塊、不傷禾稼、盜賊不生、夜不扃戶、行人讓路、道に不拾遺、

邊庭に征戰の勞なく、朝野に奸邪の患なく、郊原に蝗蝻旱澇の災なく、百姓に疲倦艱辛の苦なく、五穀よく登て天下安樂なる、是を太平の時節と云。諸人又、當時秦の政をいかゞ云べきぞと問に、趙三公申けるは、當時は法度甚だ繁ければ、我敢て不可説。諸人みな、外に聞人もなし、願くは當時の政を論じ玉へと云けれども、趙三公いかゞ思けん、只首を掉て答ざりけり。張良これを立聞して、いかさま尋常ならぬ者なりと思ければ、自ら進み出て申けるは、汝秦の政を説こと能ずんば、よく我等が説をきけ、始皇無道にして男は耕ことを得ず、女は織こと能ず、父子夫婦わかれ離れて、我は北の方長城を築き、東は大海を填、五嶺を修し、阿房を建て、焚書坑儒、大逆を肆にして、民しばらくも不安。趙三公これを聞て大に驚き、張良が高き冠を戴き博き帶を著て、面美玉の如なるを見て、直人ならずと思ひ、急に起て走り出るを、諸人ひき住て如何なる故ぞと問に、趙三公申けるは、汝等は命を惜ぬか、當時始皇が法度繁して、頭を交て物語する者あらば、市に引出して誅せんと觸たり、長居して其人に捉るなとて、飛が如に去ければ、一座の老人けにもと怕驚て、盡く走出けり。張良これを見て大に笑ひ、愚人わが機を知らず、却て我を畏るゝかと云て回んとするに、忽ち傍より相貌堂々として長一丈ばかりの壯士出來り、張良が袖を控て申けるは、適に足下の言を聞に、始皇を無